

忘れ去られた1度の発見

研究室最前線

「おもしろ海洋生物」

⑤

幻の生物サリネラ

「幻の生物」。この言葉に引き付けられる人は多いだろう。カッパ、雪男、野人…などの「目撃談」がときおりメディアをにぎわすのも、ひとえにこの未知なるものへの渴望が原因だろう。だが、結局落胆させられる。談に注目しなくても、さらに宇宙や深海でなくとも、「幻の生物」を見つけるチャンスがあるとしたら。そんな好奇心を呼び覚ます興味深い話を、京都大学フィールド科学教育研究センター・瀬戸臨海実験所(白浜町)の久保田信助教授に聞いた。

——今回は「幻の生き物」ということですが、久保田助教授 そうな物というのですが、りますね。まさに幻で、久保田助教授 ええ。す。

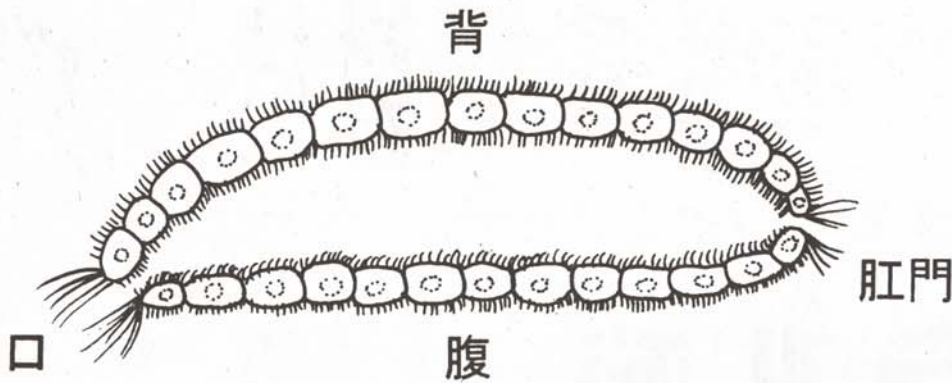
——そのときの観察で、百年以上前に初めて確認され、その後、記録がとれず、どうも生物とされだえてしまった「サリネラ」という海産の無脊椎動物です。

久保田助教授 体の大きさは顕微鏡レベル。体長は1mm前後の細長い体を構成する細胞はたった一層しかなく、内部は空洞。体表と内部に多数の繊毛が生えていて、これらの毛を動かして水の底をすべるように動きます。表面を細胞が覆い、中が空洞と

——つまり、アルゼンチンの一回きりしか見つかったというのには、前に紹介した「胞胚」の状態にあたります。

——生物進化の歴史をみると、原始的な「胚」からより複雑な「胚」段階に移行していくのですね。

久保田助教授 そうで、その「胞胚」の状態は、「囊胚」に似た構造を持つ生物からなんです。ところが、このサリネラの不思議なところに変わった生き物といえ



100年以上前にアルゼンチンで確認されたサリネラの図。体長は1mm前後で、口や消化管がある

100年以上前のアルゼンチンで 口や消化管持つ 異質な構造

——なぜ、百年以上も再発見の報告がないのか

久保田助教授 小さな生物ですから、単純に見つけにくいというのが一点。アルゼンチンの塩田という特殊な環境で発見されたことを考慮すると、世界的な分布が限定されているのかもしれない。

サリネラの異質な構造から、その存在を疑問視した学者も多かったのでは。今では、研究者の間でもほとんど忘れ去られていますね。ですが、今日まで生き続けているという可能性も否定できません。

——日本国内に生息していると考えれば、どんな場所が考えられますか

久保田助教授 宍道湖(島根県)や八郎潟(秋田県)など、海水と淡水が入りまじる汽水域の底なら、いるかもしれない。個人的にはぜひ再発見したいと思っています。そのときはサリネラの遺伝子配列を解析し、ほかの多細胞生物との系統関係を明らかにしたい。サリネラも、この広い地球のどこかで、再び人の目に触れる機会を待っているかもしれませんよ。

サイエンス